

西田幾多郎『善の研究』における〈宗教的要求〉とは何か

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ12「人間と宗教」。8月8日の第1回講演では、文学研究科の氣多雅子教授が「西田幾多郎『善の研究』における〈宗教的要求〉とは何か」と題して、西田幾多郎が宗教をどう捉えていたか、人生において宗教がどんな意味を持っていたかを紐解いた。

●『善の研究』が形成されるまで



「西田哲学の核心にある〈宗教的要求〉は、西田自身のさまざまな葛藤の中で、思想の統一や心の安定を求めた結果、結実した思想と言えるでしょう」と氣多教授

通常なら本質から入るものですね。〈宗教的要求〉は西田思想の核心にある事象。そこから語られることに、本著述の特徴があります」

西田幾多郎（1870～1945）は、東洋思想を地盤に西洋哲学を融合した「西田哲学」を樹立。“京都学派”と呼ばれる潮流の原点を創った、近代日本の代表的哲学者であり、『善の研究』は、1911（明治44）年発行の西田最初の体系的著述だ。

同著は、第一編「純粹経験」、第二編「實在」、第三編「善」、第四編「宗教」の4編からなっている。最後が宗教であり、かつ第一・二・三編それぞれの最終章が宗教に関する内容となっているのは、「宗教は哲学の終結であると位置づけられているからです」と、氣多雅子教授は話す。

「第四編の第一章が〈宗教的要求〉で、第二章が〈宗教の本質〉。宗教について考察する際、

西田は主観・客観が区別される以前の直接に与えられた経験である「純粹経験」を自己の哲学の出発点に据えており、『善の研究』も純粹経験の立場から、知識、道徳、宗教の一切を基礎づけて思考している。

西田にとって純粹経験の把握の土台となっているのが、禅体験である。20代半ばから熱心に参禅をし、実生活において悩みがあったことも、禅に傾倒する背景だったという。

当時の日記を見ても、学問と宗教、自己安心（心の安定）について、さまざまな葛藤があったことがうかがえる。

例えば、日記には「自己の思想の統一」という表現が頻繁に出てくる。『善の研究』において「統一」は根本的な問題として表れてくるのだが、この時期、西田は「哲学と自分の心の問題が一致すべき」と考え、思想の統一を求めて苦しみ悩んでいたのである。書簡にも「思想統一の近道は禅だと思う」、「学問を一生の仕事に選ぶ」といった内容が書かれている。

「このような葛藤の上で、『善の研究』が形成されたわけです。思想の統一、自己の安心を目指した西田自身が実践してきた事柄が、思想として結実したのが＜宗教的要求＞という概念だと言えるでしょう」

●宗教は手段ではない

＜宗教的要求＞は「宗教的要求は自己に対する要求である、自己の生命についての要求である」という一文で始まる。「私が」要求するのではない。自分に突きつけられるような性格の要求である。

氣多教授が「西田の考える宗教についての要点が示されている箇所」と紹介するのが、「我々は自己の安心の為に宗教を求めるのではない、安心は宗教より来る結果にすぎない」という表現だ。

自分の悟りや救いを求めて修行をすることは、自然な宗教への向き合い方だろう。「今のままではいけない」という思いがあって、自分自身の変革を求めていく。多くの場合、現在の自分が苦しく、そこから救われたいという気持ちが、自分を動かす原動力となる。

つまり、救いや悟りという目的のための手段として座禅や念仏がなされるのだが、西田はそうあってはならない、「宗教は人間の目的^{そのもの}であって、決して他の手段とすべき者ではないのである」と述べている。

●西田の考える理性と欲求、経験とは

第一編「純粹経験」第三章＜意志＞において、理性と欲求は同じ性質を持っており、「理性の要求とっている者は更に大なる統一の要求である」と述べられている。理性の要求というのは、個人の欲求を超えた普遍的なものを目指す要求だとして、同じような内容が＜宗教的要求＞でも語られている。

「でも、本当に欲求と理性の間に対立はないと言えるでしょうか。理性ではこれはして

はいけない、悪いことだと分かっているがやってしまう、どうしてもやめることができない、というのは日常的な経験ですよ

しかし、西田はこの対立を容易に統一している。それについて、氣多教授は次のように説明する。「西田にすれば、理性と欲求が対立するとどうして知ることができるのか。対立が成立するという考えの中には、やはりどこかに統一が前提とされているのではないか、ということになるのでしょうか」

また、経験についても特徴的な考え方がある。

「通常、私の経験とあなたの経験は別、私の経験はあなたには分からない、というふうに考えますね。その場合、私やあなたという個人に属するものとして経験があります」

しかし、西田には、「個人があって経験があるのではなく、経験があって個人がある」という基本的な考え方がある。経験から個人という統一のかたちが出てくる、ということだ。

「私たちが経験として知っていることには、すでにさまざまな概念操作が入り込んでいます。それらの概念操作を取り払い、純粹かつ直接的な形で取り出したものが純粹経験であり、純粹経験にまで至って初めて本当の意味で個人の経験という言い方ができるということです」

●宗教的要求は最深最大なる要求

<宗教的要求>の最終段落で、「宗教的要求は人心の最深最大なる要求である」と述べられる。さらに、すべての要求は宗教的要求より分化したものであり、発展の結果、分化が始まる宗教的要求に戻ろうとする、と西田は結んでいる。

第三章「善」の第十三章<完全なる善行>でも、「最深なる要求」という言葉が登場する。

同章で、「個人の至誠と人類一般の最上の善とは衝突することがあるとはよく人のいう所である」という表現がある。

「至誠」とは行為の動機としての真心、善いことをしようという気持ち。「この気持ちと結果との間に食い違いが生まれること、例えば、どれほど善い動機があっても、結果として相手を傷つけてしまうようなことってありますよね」と氣多教授。

しかし、西田は「至誠という語を真に精神全体の最深なる要求に置き換えれば、衝突はない」としているわけで、この考えは現実社会の“悪”の問題に対して、楽観的すぎるといって批判があるのも事実だそうだ。

ちなみに、同章には「真の自己」という言葉が出てくる。

意識の統一を求めることは、自己の確立の問題でもあるのだが、この場合の自己は個人的自我という意味ではない。一般的に使われるアイデンティティという概念は、他者から

見られることで形成される自己のことで、そこでの他者は「個々の他人」であって、相対的なものであり変化するもの。そうではなく、西田の言うのは絶対他者によって規定される自己のことである。

●なぜ宗教が必要なのか

<宗教的要求>の最終段落で、「なぜ宗教が必要かという問いは、なぜ生きる必要があるかという問いと同一である。こういう問いをするのは自己の生涯が真面目でないことを示すものである。真摯に考え生きようとする人は必ず熱烈な宗教的欲求を感じずにはいられない」として、なぜ宗教が必要かという問いを退けている。「しかし、現代でも、宗教についてそういう問いがなされることは多いですね」

ここで、氣多教授は1つの本を紹介した。

『岩波講座 転換期における人間 (9) 宗教とは』。現代社会において、宗教がどのような状況にあるかを考察した本だ。

その中の「現代人にとって宗教は必要か」という論文では、具体的な宗教団体に人々が入信する事態を例に、「宗教は自分がある世界とは別のところにあって、違う世界を形作る。そこになぜ人がひきつけられるのか」をテーマに語られる。

「これは、宗教に対する一般的なイメージではないでしょうか。私は毎年最初の授業のときに、学生たちに“宗教についてのイメージ”を聞いていますが、多くがそうした“宗教は自分とは別のところ、自分の暮らす生活空間の外にある”と考えています」

しかし、西田の考えは違う。「なぜ宗教が必要であるか」という問い方は、私たちの生活に宗教がないことを前提にしていることになり、そのことを否定しているのである。

宗教にひかれることが恐れられるのは、一種の洗脳として受け取られるからだ。「帰依することで思考停止になる」と。

「しかし宗教的要求は、理性も意志も感情も含め、人間のすべての能力、活動をもって追求していくような要求であり、思考が停止するなど実に不真面目な極地ということなのでしょう」

ただし、現代社会においては、前述のように宗教に対して洗脳と捉えるような思想状況があるため、「単純に西田の考え方に立ち返るべきだと言うことはできない」と氣多教授。

西田の宗教的要求の意味を、現代社会の中でどう捉え位置づけていくか。「このテーマを追求していきたい」と、抱負を語って氣多教授は講義を終えた。



『善の研究』の他の記述における、神に対する解釈についても質問が飛び出した。氣多教授は「西田の神の考え方は、哲学的に追求した神。キリスト教の神についての説明も、西田自身の思索の中で解釈されたものでしょう」と話した